

君のまぶたに

小さな

太陽が動く

麦藁帽子に

穴があいているから

あの人
しなやかな背を
抱きしめる

空の弧を

たぐりよせるように

ギリシャ壺の

ひきしまつた線は

君の

上半身

風をすりぬける

花びらの

小さな

ふくらみに

あの人

の指を

かくしてやるのだ

どん乍
ステンドグラスも
とおりぬけてきたのか
かな

薔薇色の夜



君はぼくの
倍ほどぼくを

思い出し

この冬の雨に

泣いていると思う

新しく
生きんと思い
文房具
やや量多く
買ってくる午後

歌なんてと
ぼくはまずいう
まるで歌に
傷つけられたことが
あるみたいに

二 生きる花壇

自分の詩集が
自分の最大の
欠点と

思える一日

まるくなつて寝る

呼吸困難の
発作の過ぎた
ぱっかりした時間
夜灯の色に
涙ぐんでいる

病気が
いまは
悲しくもない
ものを投げだす
喜びもある

ああもう
何もするなど
冬の陽が
語つている
終つたのか私は

一つ二つ
花らしいものの
立つて いる
夜の野原が
わが死場所か

ストーブの
やかんの音にも
おびえて いる
自分自身を
信じられぬ夜

だれかが
自殺したあとのような
紙の混乱
何日ぶりか
はいつた書斎は

貧しさの
きわまる夜の
太平記
武士の潔さに
心はりつく

なにもかもに

敗けた一日

運命が

なにかに勝てど

励ましてくれる日

「冷たい奴」

と

思っていた人に

またまた

えらく世話になる

不安を一つ

通りぬけた

真夜中

夜灯が

花のよう美しい

自分で
自分を馬鹿にするな

友の

へりくだりに

激怒する

この悲しみこそ

自分のための

次の扉だ

そう気づいたとき

闇が終わる

自分は
人より

不幸でなくてはならぬ
と思えるくらい

強くありたい

人並みに

生きられないのが

悲しいか

人の花とは

悲しみなのに

18

美しいもの

花咲けよ

ここかしこ

私の

破産の上にも

失つたものは
なんでもない
たゞ、たゞ、たゞ

ただの
生きた心



いろいろな
悲しみを

挿しているうちに
なんとにぎやかな
生きる花壇よ

苦しみなしの

豊かさが

あるものか

苦しみを超えた先が

豊かさだろう

三 詩業

崩れていく
事務所が

日向の

朽ち葉のように
からからに

生きられない
どうにも
こうにも

生きられない
生きていながら

妻よ
といいかけ
なんにもいえぬ
倒産必至の

啄木のように
友から
金を借り尽くし
啄木ほどになれるという
保証もないのだ